

日本語スタンダードに基づく中上級日本語作文コースの構築に向けて

— 補講コース「J500-900書く」の報告 —

木戸 光子 石上 綾子 加藤 あさぎ 田中 孝始
長戸 三成子 中山 健一 和氣 圭子

要 旨

本稿は筑波大学留学生センターで行っている日本語スタンダード作成の一環として行った、日本語補講中上級コース「書く」の授業報告である。2010年度に作成した日本語スタンダードを作成した経緯とその内容、および、2011年度の「書く」授業概要と授業内容とスタンダードとの関連を検討した。「書く」コースはアカデミック・ジャパニーズを目標としている。この報告は、その目標に向けてスタンダードの構築と各レベルの授業内容の双方を検討する基となるものである。

【キーワード】 日本語スタンダード 作文 アカデミック・ジャパニーズ

Towards the Construction of Intermediate and Advanced Writing Courses Based on Japanese Standards : a report on the Japanese writing courses J500-900

KIDO Mitsuko, ISHIGAMI Ayako, KATO Asagi, TANAKA Takashi,
NAGATO Minako, NAKAYAMA Kenichi, WAKI Keiko

【Abstract】 This paper reports on work towards developing standards for the Japanese writing courses for intermediate and advanced learners in the first trimester of 2011. In this paper, we report the processes and reasons involved in constructing standards for Japanese writing in 2010. Based on the standards, we report the summaries of the Japanese writing courses J500-J900, which are intermediate and advanced levels, during the first trimester of 2011. We also discuss the relations between the standards and each of the academic purposes and activities of the writing courses.

【Keywords】 Japanese standards, composition, academic Japanese

1. 目的

筑波大学留学生センターでは、日本語スタンダードによる学習目標の明確化とコースの透明度を促進するために、日本語補講の技能別中上級コースにおいて、日本語スタンダードの構築を目指している。日本語スタンダードに従って、学習履歴や日本語レベルなど多様な学習者に対して適切な授業を提供すること、コース全体の学習目標を明確にすること、コースの各授業内容や評価などを明確にすることが求められる。

日本語スタンダード構築の前提として従来のコースの授業や学習者の実態やニーズなど現状把握が必要である。学習者側の実態把握のため2010年12月3学期補講コース受講者に対して自由記述形式のアンケート調査を行った¹。補講受講者に対するアンケート調査の結果、作文ではアカデミック・ジャパニーズへの要望が多いことがわかった。

本稿では、技能別中上級補講コース「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能のうち、「書く」すなわち作文のコースに関して、授業担当者の立場から、2011年1学期の授業で行ってきたことを報告する。あわせて、2010年度の授業担当者が作成した「書く」授業のための日本語スタンダード案²について作成経緯を紹介し、2011年度1学期授業とスタンダードとの関連も検討する。

2. 補講コース「J500-J900書く」日本語スタンダード構築の試み (和氣圭子)

近年、日本語教育の各段階において、どのような教育を行うべきなのか、何を目標とすべきか、ということについて、基準を設けようという動きが広がっている。その際に主に参照されているのは、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages, ヨーロッパ共通参照枠) や国際交流基金によるJF日本語教育スタンダードであろう。

CEFRは、複言語主義に基づき、ヨーロッパのEU域内における言語教育の内容や評価等に、共通した一般的基盤を与えることを目的としている (Council of Europe, 2001)。ここでは、多言語環境である域内での人の移動、協調や交流、相互理解を推進するものとして言語学習が位置づけられている。また、学習者中心という考え方から、学習者が自らの学習を計画し継続できるようなツールとしての枠組みを提供する。規定を押しつけるのではなく、あくまで、個々の状況に応じた学習目標を明確に表現するための枠組みとして設けられている。CEFRが目指すのは、言語知識、機能、使用のすべての領域にわたる包括的 (comprehensive) な³、そしてすべての学習者・教育者が学習内容・目的を表現できるように明確 (transparent) で、かつ一貫性を持つ (coherent) 枠組みである。

CEFRでは、共通参照レベル (Common Reference Levels) と例示的能力記述文 (illustrative descriptors) が示されている。共通参照レベルは、A1 (使い始め、基礎段階) からC2 (熟練) までの6段階ある。例示的能力記述文は、1) コミュニケーション活動、2) 方略、3) コミュニケーション言語能力、の3つの視点から、「ができる」というCan-do型で記

されている。

国際交流基金のJF日本語教育スタンダードは、多様化する日本語教育に共通の基盤を設けようと整備された（国際交流基金，2009，2010）。社会の中で多様な人々が互いを理解するという「相互理解のための日本語」を理念とし、その達成のために「課題遂行能力」「異文化理解能力」の2つの能力の発達を軸として考えている。CEFRを範として開発され、CEFR同様に教育内容を規定するものではなく、言語教育環境をデザインする際の枠組みや目安を提供する、とされている。現在提供されているのは、1) 能力記述文データベース、2) ポートフォリオサンプル、3) 教育実践に活用するための事例集、である。

高等教育機関が設定したスタンダードとしては、東京外国語大学の「JLC日本語スタンダード」がある（東京外国語大学，ホームページ参照）。これは、汎用性の高いものではなく、大学での日本語教育に特化して考えられたものである。各段階で何を目標とし、どのように教育していくかの基準として考え出された。大学では、留学生が個人としては習得しにくい「大学等の勉学に直接的に必要な日本語」を優先的に教える必要があると考え、この範囲での基準として作成されている。

JLCスタンダードは、「聞く」「話す」「読む」「書く」に「話す聞く」を加えた5技能について、初級から上級までの5段階のレベルを設定している。そして、各技能、各段階で到達すべき「行動目標」が立てられ、それを実現させるための具体的な技能として「スキル」の記述がある。

以上のように、CEFRを中心に、各言語、各機関においてスタンダードの開発が進められている。スタンダード設定が必要な理由として、JLCスタンダードでは、(1) コース設計の基準となり、担当者間の意思疎通が容易になる、(2) 教師にとって目標が明確になり、よりどころとなる、(3) 学習者にとっては目標が明確になり、自分のレベルや足りないところが見える、(4) 教育機関連携に関して、複数の教育機関での目標やレベルがわかりやすくなる、ということが挙げられている。CEFRの基準に沿えば、学習者が自分の学習している言語のレベルや目標について、共通した枠組みの中で捉えることができる。複数の言語を学習している場合、自分はどの言語で何ができるか、という説明も共通基盤で可能になる。また、教育者の側にとっても、他機関から移動してきた学習者のレベル把握、他機関の教育内容や評価との比較が可能になる。筑波大学留学生センターにおいても、こうした利点を取り入れるべく、スタンダード構築の試みが始まった。本コースで行われている日本語教育の実情と照らし合わせ、どのように構築・活用していくべきかを模索しているところである。

2010年度、筑波大学留学生センター・補講コース「書く」では、「J500-J900書く」のスタンダード素案を作成した。まずはCEFRの3つのカテゴリー、「書くこと全般」「レポートや記事を書く」「話題の展開（ディスコース能力）」を最も中心的な課題と考えた。そし

て、この3カテゴリーの例示的能力記述文から、各レベルの目的・内容に合致するものを選択し、一部記述の変更を行ったのが、下の表である。いくつかの記述文は複数レベルに渡って取り上げているが、これは、習熟するには1レベル10週間では不十分であり、継続的に学習目標とする必要がある、ということである。なお、表1のCan-do本文とlevelはCEFRを一部改編しており、項目番号は便宜上付けたものである。

表1 2010年度「書く」担当者による日本語スタンダード案

1. 書くこと全般（種類：活動、言語活動：産出）

項目番号	CEFR Level	Can-do本文（日本語）	500	600	700	800	900
1	A2	「そして」「しかし」「なぜなら」などの簡単な接続詞でつなげた簡単な表現や文を書くことができる。	○				
2	B1	一連の短い別々になっている要素を一つの流れに結びつけることによって、自分の関心が及ぶ身近な話題について結束性のある簡単なテキストを書くことができる。		○	○	○	
3	B1.2	一連の短い別々になっている要素を一つの流れに結びつけることによって、自分の関心が及ばない身近でない話題についても結束性のある簡単なテキストを書くことができる。			○	○	
4	B2	自分の関心がある専門分野の多様な話題について、明瞭で詳しいテキストを書くことができる。いろいろな情報や議論を、評価した上で書くことができる。				○	○
5	C1	複雑な話題について、明瞭にきちんとした構造を持ったテキストを書くことができる。関連性のある重要点を強調して、補助的事項、理由、関連する事例を詳細に加えて論点を展開し、それを維持していくことができる。最後に、適切な結論で終わることができる。					○
6	C2	適切で印象的な文体と理論的な構成を用いて、明瞭に調子よく、すらすらと複雑なテキストを書くことができる。読者に重要な点がわかるようになっている。					○

2. レポートや記事を書く（種類：活動、言語活動：産出）

7	B1.1	日常的な事柄の事実関係を述べ、行動の理由を説明する。極めて短い報告文を標準的な常用形式に沿って書くことができる。	○	○	○		
8	B1.2	関心のある話題についての短い、簡単なエッセイを書くことができる。		○	○		
9	B1.2	自分の専門範囲の日常的もしくは非日常的な事柄について、事実の情報を蓄積した上で、総括し、報告できる。また、それに対し、ある程度の自信を持って自分の意見を提示することができる。				○	○
10	B2.1	いろいろなところから集めた情報や議論をまとめることができる。			○	○	○
11	B2.1	エッセイやレポートを書く時に、根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、さまざまな選択肢の利点と不利な点を説明できる。				○	○
12	B2.2	いろいろな考えや問題の解決法を評価することができる。				○	○
13	B2.2	議論を整然と展開して、エッセイやレポートを書くことができる。重要な点や関連する補足事項の詳細を、適切に強調することができる。					○
14	C1	複雑な話題について、明瞭な構想で、きちんと記述し、重要な関連点を強調しながら、書くことができる。					○
15	C1	補助的な観点、理由、関連する事例を詳細に加えて視点を展開し、ある程度の長さの文が書ける。					○
16	C2	明瞭で流れるような、複雑なレポート、記事、エッセイで、実情を説明したり、提案や文学作品の批評文を書くことができる。					○
17	C2	読者に重点が分かるように、適切で効果的に論理を構成することができる。					○

3. 話題の展開（ディスコース能力）（種類：能力、言語活動：語用能力）

18	A2	ポイントを簡単に並べ上げる形で、物事を語ったり何かを記述できる。	○	○			
19	B1	要点の組み立ては直線的であるが、単純な筋や描写を述べるができる。		○	○		
20	B2	論拠となる詳細関連事項や具体例などによって自分の主要な論点を補強して、明快な描写や話をするができる。				○	
21	C1	複雑な描写をしたり、複雑な話をするともでき、下位テーマを統合させながら、特定の点を発展させたり、適切な結論でまとめることができる。					○

表1のこれはあくまで案であり、まだ未検討の課題や今後改善すべき点も多い。

大きな課題の一つは、正書法に関する問題である。CEFRには「正書法の把握」のCan-do Statementsがあるが、日本語のような複雑な文字体系を念頭に置いているわけではない。国際交流基金のJF日本語教育スタンダードでは、まだ正書法に関するCan-do は明示されていない。これは、「『表記』、すなわち『漢字』の習得と使用に関する難易度と、それぞれのレベルとカテゴリーにおける必要量をどのように規定し記述するかという難題と密接な関係にある」（嘉数，2011）ためである。漢字の習得は、漢字語彙の運用力につながる。文型や文体に合った語彙を選択すること、つまり文章の内容や目的に合わせた語彙の運用ができるかどうかは、漢字の習得と大きく関連する。漢字を含めた正書法の把握は作文能力に大きな影響があるわけだが、この点についての記述は今後の課題である。

もう一点は、作文の話題・テーマ設定である。全体的にはレベルが上がるに従って、日常的で具体的な内容から、非日常／専門的で抽象的な内容について書ける、ということへ目標が移っていく。だがどのレベルで何を話題にするか、という具体的な設定はまだなされていない。第二言語学習における作文では、タスク（語彙リストがある／モデルがある）やテキストタイプ（意見文／説明文／物語文、など）によって、産出される作文の流暢さ・複雑さ・正確さが影響を受けることが示されている（Way, Joiner and Seaman, 2000）。これは、テキストタイプによって、必要な語彙や文型、文章構成等が異なるということを反映しているであろう。話題設定によっても同じような影響が想像される。「書く」コース全体の最終目標に合わせ、各段階での話題を設定することが必要だと考えられる。

3. 「J500-J900書く」2011年度1学期の授業

ここでは、授業担当者の立場から2011年1学期の授業概要を報告するとともに、2010年度に作成した日本語スタンダード案との関連も検討する。表2は2011年度「書く」の授業概要をまとめたものである。

表2 「J500-J900書く」2011年度1学期の授業概要

		中級前期		中級後期		上級
		500(長戸・加藤)	600(石上・加藤)	700(中山)	800(田中)	900(木戸)
行動目標		・よく知っている事柄について、400字程度のまとまりのある文章が書ける。	・身近な話題について、500字程度の読み手にわかりやすい文章が書ける。	・抽象的な事柄も含め、600字程度のまとまりのある文章が書ける。	・社会的、文化的なテーマについて論理的な文章が書ける。	・特定の話題について事実・意見を再整理して構成の整ったレポートが書ける。
スキル	字数	・400字程度	・500字程度	・600字程度	・800~1000字	・1200字以上
		・日本語作文のルールが分かる。 ・構成(始め→中→終わり)を考慮し、③段落程度に分けて文章を書くことができる。 ・適切な表現文型を用いて、簡単な説明文、意見文が書ける。	・文章構成の型に倣って文章が書ける。 ・具体例を挙げたり引用したりしながら、順序立てて意見が述べられる。 ・適切な表現や結語を用いて、説明文や意見文が書ける。	・読み手を意識して、論理的に一貫し、構成の整った文章が書ける。 ・根拠を挙げた意見が述べられる。 ・正しい構文で書ける。	・事実と意見を書き分けられる。 ・制度、仕組みについて客観的に説明できる。 ・評価、主張をもった結論が書ける。 ・要約ができる。	・事実と意見を再整理できる。 ・全体構成の整ったレポートが書ける。
項目	書き言葉の表現	・書き言葉の表現(「です・ます体」と「だ・である体」の区別)	・書き言葉の表現(文体に合った書き言葉の表現)	・書き言葉の表現	・書き言葉の表現	・レポート・論文の書き言葉
	文体	・です・ます体(自己紹介文) ・である体(説明文)	・である体	・である体(ただし、「Eメール」では丁寧な依頼の文体)	・である体	・レポート・論文の文体(である体)
	段落	・段落内の構成(中心文と支持文) ・段落間のつながり(簡単な説明→具体的な説明→まとめ)	・順序立てて段落間を適切につなげる	・段落内の中心文と支持文 ・段落のつながり	・段落内を論理的に書ける ・段落を適切につなげる(接続)	・段落内と段落間を論理的に関係づける表現(文型、接続詞、文章型)
	機能表現	・簡単な定義と分類 ・変化を示す文末表現 ・主部に呼ばれた述部の名詞化 ・比較表現 ・原因・結果、理由・目的の表現 ・意見文の表現	・引用・伝聞の表現 ・目的を示す表現 ・順序を示す表現 ・因果関係を示す表現 ・定義、分類、例示の表現 ・意見・主張を述べる表現	・正しい構文(主語・述語) ・文末表現と副詞等との呼応 ・指示語 ・接続詞	・意見文の表現 ・時系列にそった表現 ・展開からの引用 ・比較対照と考察 ・因果関係の説明 ・主張を把握した要約	・課題の提示、定義と分類、同意と反論(1学期)；図表の提示、変化の形容、対比と比較、数値データの表現、原因の考察、列挙(2学期予定)；定義、状況、原因、列挙、順接、逆接、換言、補足(3学期予定)
	文章の種類	・自己紹介文 ・説明文 ・比較文 ・意見文	・紹介文 ・報告文 ・説明文 ・意見文	・簡単なレポート文 ・意見文 (目上の人へのフォーマルなEメール)	・意見文 ・比較文 ・要約 ・論説文 ・説明文	・レポート(1学期)；意見主張、2学期予定；数値データによる実証、3学期予定；事実説明
テーマ・素材	・自己紹介 ・自分の専門的説明 ・自分の国と日本の比較 ・日本生活で困ったこと、その解決法に関する意見	・出身都市の紹介 ・日本へ来て体験したこと ・少子化/ブレイドカード ・環境問題	・寄者の読書報れ、国民性、異文化摩擦、新聞の投書への反論	・現代日本の問題点 ・行事や組織、事件の歴史 ・日本と学習者の国の社会制度・規則等の客観的な比較と評価 ・社会的・文化的現象、時事的な問題の因果関係の説明	・現代日本の時事的問題 ・社会科学・人文科学に関連した問題	
活動	・宿題作文のフィードバック(良い作文紹介とポイント説明) ・機能的表現を使った短文の作文練習(一部A活動)	・宿題作文のフィードバック(グループ/ピア活動含む) ・機能的表現を使った短文の作文練習 ・構想メモの作成	・宿題作文のフィードバック(含ペア/グループ活動) ・上記「項目」の導入・練習	・宿題作文のフィードバック(グループ/ピア活動含む) ・読み手を意識して書くことへの意識付け ・文体、文型と表現の練習	・新聞記事要約(15分)、フィードバック(一部B活動) ・書き換え作文、フィードバック ・レポート作成	
教科書・教材	・独自教材(ただし、市販の各種中級作文教材を引用、または参考になっている)	・独自教材(ただし、市販の各種中級作文教材を引用、または参考になっている)	・独自教材(ただし、市販の各種中級作文教材を引用、または参考になっている)	・『留学生のための論理的な文章の書き方』2通信子他 ・新聞社報、報道記事 ・その他、独自教材	『大学大学院留学生の日本語4論文作成編』 『日本の論点』(文藝春秋) ・新聞報道記事	
対象レベル	・初級文法(SFJ vol1~3程度)を修了した者 ・日本語能力試験3級程度の文法・語彙力を有する者	・中級程度の文法・語彙力を有する者 ・日本語作文の基本的なルールがわかり、400字程度の文章が書ける者	・中級(600レベル)の書く力がある者(身近な事柄について500字程度の文章が書ける) ・中級(600レベル)の文法を習得している者	・J700書くのレベル相当を修了していること ・中級後期レベルの文法力、語彙力があり、漢字を1000字以上使用できる者	・日本語能力試験1級程度の文法・語彙の知識と運用力のある者	
授業外学習	・400字程度の課題作文の作成・修正(8回)	・500字程度の課題作文の作成・修正(8回)	・課題作文の作成(10回)	・課題作文の作成・修正(10回)	・1~3時間必要、宿題と教材予習	
評価	・出席 10% ・宿題 50% ・試験 40%	・出席 10% ・宿題 60% ・試験 30%	・宿題 50% ・小テスト 10% ・期末試験 40%	・課題作文宿題(構成・論理性) 文法・内容など)40% ・宿題の書き直し40% ・期末試験(要約と作文)20%	・レポート50% ・宿題25% ・試験(記事要約)25%	

3.1 J500書く(加藤あさぎ・長戸三成子)

3.1.1 授業概要

「J500書く」は、筑波大学留学生センターの日本語コースにおいて、J100~J400までの初級コース(『Situational Functional Japanese』vol.1, 2, 3を使用)を修了した学習者、及びそれに準ずるレベルの学習者が、J500から始まる技能別クラスにおいて、初めて「書く」ことに特化して学ぶクラスである。このクラスで習得目標としている「書く」ためのスキルは、具体的に以下のようなものである。

- (1) 初級文法を正確に使用して、300~400字程度のまとまった文章が書ける。
- (2) 日本語作文の書き方のルールを理解する。

(3) 話し言葉との違いに注意して、書き言葉として相応しい文体、表現が使える。

(4) 構成（始め→中→終わり）を考えて、3段落程度に分けて文章が書ける。

(5) 適切な表現文型を用いて、簡単な説明文、比較文、意見文が書ける。

J500では、400字程度のまとまりのある文章が書けるようになることが第一の課題である。その上で分かりやすい文章を書くためには、正しい文法表現の使用は欠かせない。これまで学習してきた初級文法も実際に文脈の中で見ていくと、使うべきところで使えなかったり、使い方が不適切であったりして、正確に使えない場合が多い。このような問題に対しては、各回の授業で取り上げる機能表現を用いた単文作成練習と400字程度の宿題作文によって、誤用の再確認や理解文法から使用文法への移行を目指している。

次に重要となってくる基本的事項は、規則に従って文章を書くことである。原稿用紙の使い方を始め、句読点の打ち方や記号の使い方、段落の変え方などの基本的なルールを確認していく。J500では、学習者自身による適切な語彙・文型選択の確認の目的から、パソコンの機能に頼らず、基本的に手書きで作文させるようにしている。

さらに、文体の問題では、J500を「です・ます体」から「だ・である体」への移行期と捉え、自己紹介文のように「です・ます体」でも書くことができる私的な文章から、説明文や意見文のように「だ・である体」で書くことが望ましいアカデミックな文体へと移行していく。文体に加え、「すごく」「ちょっと」など話し言葉では問題のない表現が、書き言葉としては適切ではないこと、それに代わる表現があることも指導していく。

文章の段落構成については、内容のまとまりごとに段落を区切れなかったり、段落間のつながりを考慮せずに唐突に話を展開させていく傾向に陥りがちな学習者に対して、適切に接続詞を使いながら、まずは3段落程度に分けて文章を書くことを指導している。1段落目に自分が伝えたい主張の「簡単な説明」、2段落目にその「具体的な説明」、最後の段落で「まとめ」をする。内容によっては、2段落目がいくつかの段落に分かれる。

J500で取り上げる機能表現は、分類、変化、比較、原因・結果、理由・目的などで、それらをどのように使えば、自分の伝えたいことを正しく、効果的に表現できるのかを単文作成練習、ピア・グループ活動、モデル作文の参照、宿題作文による実践を通して学習していく。最終的には、学習した表現を活用して、自分の意見が表明できるようになることを目標としている。

このようなスキル獲得を目指し、2011年度1学期（2011年5月～7月）に使用された10回の授業シラバスは表3の通りである。毎回の授業課題に練習問題を通して取り組みながら、その成果を宿題作文で確認する。宿題では同じトピックで2回ずつ作文させる。具体的な内容については自由である。1回目の添削の際は、教師による誤用訂正はせず、下線や記号で誤用の種類のみを知らせ、内容や構成についてはコメントを入れている。それをもとに学生自身に訂正させ、2回目の提出時に最終的に教師が評価し訂正する。また、毎

回の授業の始めには、宿題作文に関する全体フィードバックを必ず行っている。

表3 「J551書く」2011年度1学期 授業概要

回	授業内容	宿題作文
1	レベルチェック作文、オリエンテーション 第1課：日本語作文のルール	自己紹介文
2	第2課：「だ・である」体と書き言葉	自己紹介文（書き直し）
3	第3課：構成を考えて段落を作る 簡単な定義をして説明する	自分の専門について
4	第4課：順序立てて説明する 変化を説明する	自分の専門について（書き直し）
5	第5課：首尾一貫した文章を書く 比較して説明する	自分の国と日本との比較
6	第6課：文や段落をつなげる 因果関係（原因・結果）を説明する	自分の国と日本との比較（書き直し）
7	第7課：理由・目的を説明する	日本生活で困ったことと、その解決法
8	第8課：意見を述べる① 自分の主張・判断を述べる時の表現	日本生活で困ったことと、その解決法 （書き直し）
9	第9課：意見を述べる② 意見を述べる時の書き言葉	
10	期末試験（筆記、作文）	

3.1.2 スタンダードとの関連

2010年度スタンダード案における500レベルで達成すべき項目は、「**「そして」「しかし」「なぜなら」**などの簡単な接続詞でつなげた簡単な表現や文を書くことができる。(項目1)」、「**「日常的な事柄の事実関係を述べ、行動の理由を説明する。極めて短い報告文を標準的な常用形式に沿って書くことができる。(項目7)、「ポイントを簡単に並べ上げる形で、物事を語ったり何かを記述できる。(項目18)」**の3つである。

項目1の接続詞については、第6回授業において、文と文、段落と段落を正確につなげることを目的として扱った。その他にも、第4回で項目を挙げる表現及び順序を表す表現として、第5回で比較を表す表現として、数種類の接続詞を導入している。項目7及び項目18については、第5回以降の「**自分の国と日本との比較、「日本生活で困ったことと、その解決方法」といった課題作文において、特定の事柄について説明をしたり、それについての自分の意見やその理由を述べる中で十分に扱うことができた**と考える。

したがって、「J500書く」の学生の書く力を外的基準であるCEFRを用いて示すならば、A2.2～B1にほぼ該当するであろうと思われる。上記の3項目以外では、下記に示された項目内容も今期のクラス活動において扱われてきたと考える。スタンダード構築に際し、

こうした項目を盛り込むべきかについても、検討の余地があると思われる。

●CEFR (B1)、カテゴリー：書くこと全般

一連の短い別々になっている要素を一つの流れに結びつけることによって、自分の関心が及ぶ身近な話題について結束性のある簡単なテキストを書くことができる。(項目2)

●CEFR (B1)、カテゴリー：正書法の把握

綴りや句読点、レイアウトなどは、ほとんどの場合読者を混乱させない程度に正確である。

3. 1. 3 次学期へ向けた改善点

今期の授業内容については、練習問題を消化するのに多くの時間を使い、学習者一人ひとりの問題点を把握するところまでは行き届かず、短文作成問題では、数名の確認をしていく形式になることが多かった。問題量の調整については、クラスの進度に応じて、扱う練習問題を取捨選択して柔軟に対応していくことが望ましい。また、1回分の授業に割り当てるのに妥当な内容量については、2014年度より3学期制から2学期制移行のため、2学期制に対応した授業作りの検討材料として記録する必要がある。

宿題作文のフィードバックでは、語彙、文法表現、作文の書き方などの比較的単純な誤用については、全体で確認していくことは容易であったが、内容、構成に関わる複雑な誤用は、個々に訂正することはしても、全体で共有することはあまりできなかった。一方、良く書かれた作文の紹介は、構成の仕方のポイントや効果的な表現を紹介する上で役立った。複雑な文法的誤用（複文のつなげ方、主部と述部の一致、自動詞・他動詞の問題など）や、構成や内容に関わる誤用のフィードバックについては、誤りの実例をプリント等で配布し、グループやクラスで訂正文を考える時間を作っていきたい。

評価については、毎回の学習成果をみるのが宿題作文であり、そのフィードバックと訂正を通して繰り返し実践的に学ぶことがこのコースの軸となるため、宿題に評価全体の50%を課していたが、J600において十分な文法能力や作文の基礎知識を持ち合わせていない学生の存在が問題になっている現状を踏まえると、到達度を重視して、期末試験の割合を増やすことも検討すべきであり、また宿題の評価基準を担当者間でより厳密に定める必要もあると思われる。さらに、学習項目の定着が十分に図れていない学習者のレベル間移動には柔軟に対応すると同時に、自分の能力を客観的に評価できるチェックリストを作成し、それをもとに個別にカウンセリングをするなど考慮の余地がある。

最後に、スタンダードとの関連については、J500レベルでは「日常的な事柄」「身近な話題」についてまとまった文章を書くことが中心にはなるものの、現在のコースにおけるトピックは「自分」について述べることに終始しているため、「身近な話題」であっても、社会的なトピックも少しずつ取り上げていくことは検討課題である。

3.2 J600書く (石上綾子・加藤あさぎ)

3.2.1 授業概要

J600においては、中級前期の学習者を対象に、行動目標を「身近な話題について500字程度のわかりやすい文章が書ける」とし、具体的に以下のようなスキルを挙げる。

- ・今まで学習した文法や表現を正しく使って、読み手にわかりやすい文章を書くことができる。
- ・モデル文を参考にしながら物事を説明したり、身近な話題や社会問題について自分の意見を述べる文章を書くことができる。

各学期10回の授業の中で、モデル文を読みながらそれぞれの文の構成や表現、文法項目を学び、作文を書く練習を行う。そして、実際に与えられた課題で作文を書く練習を行っている。2011年度1学期のシラバスは表4の通りである。

表4 「J651書く」2011年度1学期 授業概要

回	授業内容	宿題
1	オリエンテーション レベルチェック作文「留学の目的」(400字) 20分構想メモに従って書く	課題1:「都市の紹介」(出身都市について書く)
2	「都市の紹介」の作文を読む 引用する	課題1の書き直し
3	体験したことを報告する文を書く	課題2:「日本へ来て体験した不思議なこと、面白いこと」
4	「日本へ来て体験した不思議なこと、面白いこと」 の作文を読む 作文と小論文の違い	課題2の書き直し
5	定義	課題3:「少子化/プリベイドカード」(定義の作文を書く)
6	「少子化/プリベイドカード」の作文を読む 意見を書く	課題3の書き直し
7	テーマにそった意見文を書く(1)	課題4:「環境を考えた生活」 (身近な社会問題について意見を述べる)
8	「環境を考えた生活」の作文を読む テーマにそった意見文を書く(2)	課題4の書き直し
9	表現の復習	
10	期末試験	

3.2.2 スタンダードとの関連

2010年度スタンダード案における600レベルで達成すべき項目は、「一連の短い別々になっている要素を一つの流れに結びつけることによって、自分の関心が及ぶ身近な話題について結束性のある簡単なテキストを書くことができる。(項目2)」、「日常的な事柄の事

実関係を述べ、行動の理由を説明する。極めて短い報告文を標準的な常用形式に沿って書くことができる。(項目7)」、「関心のある話題についての短い、簡単なエッセイを書くことができる。(項目8)」、「ポイントを簡単に並べ上げる形で、物事を語ったり何かを記述できる。(項目18)」、「要点の組み立ては直線的であるが、単純な筋や描写を述べるができる。(項目19)」の5つである。

全体的に、課題作文のテーマを、自分に関することや身近な(日常的な)内容のことから次第に意見文や抽象的な作文を書くように設定しており、全ての項目において扱うことができたと思われる。項目7については、第6回授業において、事実関係を述べる表現を取り上げた。ディスコース能力に関する項目18及び項目19については、初回授業から構想メモの作成を扱い、要点を整理すること、全体の構成のメモを作成してから書くということを、10回の授業を通して徹底した。後半は社会的なトピックを課題作文のテーマとしており、全体の構成のメモについても、全て教師がチェックを行った。

後半はこちらが指定した社会的なトピックを扱っている点から、2010年度スタンダード案においては700レベルとされている「一連の短い別々になっている要素を一つの流れに結びつけることによって、自分の関心が及ばない身近でない話題についても結束性のある簡単なテキストを書くことができる。(項目3)」は600レベルにも含めることができるかもしれない。今後のスタンダード構築に際し、600レベルの項目を見直すのか、授業内容を検討するののかといった課題となるものと思われる。

3.2.3 次学期へ向けた改善点

今学期、課題作文の添削を通して、学生の中に、基本的な文法事項の間違いと「書く」表現の間違いの両者が見られた。特に文法力の弱い学生が多かった。履修している学生がブレイスされている文法クラスを確認するとJ500の学生が数人いた。やはり、「書く」J600のクラスでは600相当の文法力が必要である。そこで、原則として文法はJ600を履修していることを履修の条件としたい。また、書き言葉の表現、だ・である体という「書く」J500で身に付けるべき事項も定着していない学生が見られた。「書く」J500を履修、または400字程度の作文が書けるということも条件としたい。

また、課題作文については、宿題として書いてくることになっているが、学生に課題についてよく理解させる必要があった。作文の課題について、クラスで話し合いをし、具体的な社会現象をとらえたり、各自の意見を出すような活動を取り入れてから作文に取り組みせたい。そして、学生が意欲的に、内容が豊かで分かりやすい文章を書けるような指導をしたい。訂正についてであるが、2回目に提出した作文の訂正箇所が正しく直されているかチェックすると、どのように直して良いのか分からないため直していなかったり、正確に直せていないこともあった。教師が訂正コメントを書いても、意味が伝わらず再度

間違えることも多かった。また、ピア/グループ活動で互いに作文を読み合い、他の学生のコメントが聞けるのは良いが、他の学生が指摘した訂正が正しいとは限らない。今学期は1クラスの人数が(7~8名)だったため、個別にどのように訂正したらよいか学生と面談しながらできたことは良かった。今後も面談の時間も取り入れていきたい。しかし、クラスの人数によって限界がある。

スタンダード構築に関連して、3.2.2で述べたように、600レベルにおいて目標とする項目の見直し、授業内容の見直しも課題である。後者については、上述の文法力の弱い学生の問題とも関わっている。いずれにせよ、他レベルも含め、担当者間で十分に話し合っていく必要がある。

3.3 J700書く(中山健一)

3.3.1 1学期の授業の概要

行動目標は、「抽象的な事柄を含め、600字程度のまとまりのある文章が書ける」とし、そのためのスキルとして以下の3つを挙げた。

- ・読み手を意識して、論理的に一貫し、構成の整った文章が書ける。
- ・根拠を挙げて意見が述べられる。
- ・正しい構文で書ける。

授業では、そのために必要な文法項目や表現を導入・練習し、同時に、段落の構成に注意した作文の書き方を導入・練習した。それをもとに、毎回授業後に作文を書く宿題を行った。具体的な内容は以下のとおりである。(ただし、初回の「丁寧な目上の人へのメール

表5 「J751書く」2011年度1学期 授業概要

回	文法項目や表現	段落の構成	宿題
1	(授業の説明・レベルチェック作文)	丁寧な目上の人へのメールの書き方	(1)お願いのメール
2	書き言葉・引用の方法	宿題(1)フィードバック データをもとに物事の因果関係を論じる	(1)お願いのメール：書き直し (2)読書離れ
3	書き言葉	宿題(2)フィードバック	(2)読書離れ：書き直し
4	正しい構造の文	段落内の中心文と支持文	(3)国民性について
5	正しい構造の文	宿題(3)フィードバック	(3)国民性について：書き直し
6	文末の制限のある表現	複数の段落の論理的なつながり	(4)異文化とのふれあい
7	指示語	宿題(4)フィードバック	(4)異文化とのふれあい：書き直し
8	接続詞	意見文(根拠を示し他者の意見に反論する)	(5)投書に対する意見
9	接続詞	宿題(5)フィードバック	(5)投書に対する意見：書き直し
10	(期末試験)		

の書き方」は趣を異にするが、学生にとって必要な技能であると思われるため扱った。)

3.3.2 授業内容とスタンダードとの関係

この700レベルで達成すべきスタンダードの項目について、紙幅の都合上すべてを示すことができないが、項目9「自分の専門範囲の日常的もしくは非日常的な事柄について、事実の情報を蓄積した上で、総括し、報告できる。また、それに対し、ある程度の自信を持って自分の意見を提示することができる」、項目3「一連の短い別々になっている要素を一つの流れに結びつけることによって、自分の関心が及ばない身近でない話題についても、結束性のある簡単なテキストを書くことができる」、項目11「エッセイやレポートを書く時に、根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、さまざまな選択肢の利点と不利な点を説明できる」、項目10「いろいろなところから集めた情報や議論をまとめることができる」など、抽象的なことからについて論理的なエッセイ・レポートを書けるようになることを目指している。

授業では、まず項目9について、各宿題とも（初回のメールを除く）、適切な具体例を挙げた上でそれを総括するという構成で書かせた。また、社会的なトピックをこちらから指定して作文を書かせることで、「自分の関心が及ばない身近でない話題」（項目3）についても書けることを目指した。項目3で挙げられている「結束性」について、段落の構成に加え、指示語・接続詞といった表現の練習を行った。項目11について、根拠を示し他者の意見に反論するような意見文を書かせた。

しかしながら、項目10については、学生にとって重要な技能であるにも関わらず、1学期の授業では積極的に行うことができなかった。

3.3.3 次学期へ向けた改善点

スタンダードの項目10「いろいろなところから集めた情報や議論をまとめることができる」については、1学期の授業では積極的に行うことができなかった。これをクラス活動で積極的に盛り込む方法として、上記の表5で「データをもとに物事の因果関係を論じる」の活動に入れる方法がある。この回では「読書離れ」に関する世論調査のデータを示し、読書離れの原因について論じさせたものである。1学期では学生の中に、教師が提示した簡単な世論調査に加えて自身で探したデータを引用する者もあった。次学期は、いくつかのデータを提示し、さらに、必要に応じて自身の集めたデータを使ってもよいと指示し、自身でデータを選んで論を展開するような活動にしたい。

3.4 J800書く (田中孝始)

3.4.1 1学期の授業の概要

J800レベルでは、中級後期学習者を対象に、主に抽象的な事柄について、800から1000字程度の論理的な文を書けるようになることを目標として、以下の課題を挙げた。

- ①社会的、文化的なテーマを話題にしたモデル文を参考に、論理的な文の展開の仕方について考え、論理的に書くとはどういうことかを学習する。
- ②文章の目的に合った表現や文型を練習する。
- ③客観的情報・資料を用い、全体の構成に注意しながら、段落を適切につなげた論理的な文章を書く。

授業では(1) 段落の構成の仕方と段落相互の接続 (2) 時間軸に沿って歴史的な経過を書く (3) 文章の要約の方法 (4) 比較・対照と考察 (5) 因果関係の説明 (6) 意見文の書き方、以上を具体的な学習項目として取り上げた。(下記シラバス参照)

表6 「J851書く」2011年度1学期 授業概要

回	授業内容	宿題
1	オリエンテーション レベルチェック作文 論理的に書くためには：段落-1 意見文の書き方-1	宿題1「寮で独り暮らしをするのとアパートで友達と共同生活するのとどちらの方がいいかの意見文を書く」
2	論理的に書くためには：段落-2 論理的に書く：時間軸に従って書く-1	宿題2「組織や行事、祭り、事件の歴史を時間軸に従って書く」
3	論理的に書く：時間軸に従って書く-2	宿題2 書き直し
4	要約の仕方-1	宿題3「指定された文の要約を書く」 (日本の日雇い労働者の生き残りについて)
5	要約の仕方-2	宿題3 書き直し
6	考察する：比較・対照-1	宿題4「社会的制度や規則、あるいは自分の専門領域について日本と自国とを比較する文を書く」
7	考察する：比較・対照-2	宿題4 書き直し
8	論理的に書く：因果関係を説明する-1	宿題5「指定された3つのテーマのうち一つを選択し、因果関係を書く」
9	論理的に書く：因果関係を説明する-2 意見文の書き方-2	宿題5 書き直し
10	期末試験	

授業は、学習の課題に即したモデル文を読み、全体の構成や論理手法について考え、学習者の意識化を促す。そして、必要な文型や表現を学び、宿題として教師が提示したテーマで800字から1000字程度の課題作文を書く。宿題は提出後、教師が添削し、次の授業の際にフィードバックを行うという流れで行った。

フィードバックは個人的に行うこともあったが、主に学習者が書いた作文の中で、全体の構成がまとまっており、学習項目のポイントをしっかりと押さえて書いてあるよい例と、そうでない例のコピーを配布して、どこがいいか、どこが悪いかを教師が指摘したり、学習者に考えてもらったりした。また、学習者同士で作文を読み合い、お互いに内容に関する質問をすることで、学習内容に関する認識を深め合い、表現を吸収し合い、それを踏まえて書き直しをしていくというやり方をするということもあった。これは常に読み手を意識して書くことへの意識付けの意味もあった。

授業の最後に期末テストを行ったが、東日本大震災における福島原子力発電所の事故によって巻き起こった原発推進か、脱原発かという議論についての新聞社説を読み、それを要約する。そして原子力発電について、理由を挙げて自分の考えを述べるという2つの課題について書いてもらった。

3.4.2 スタンダードとの関連

2010年度スタンダード案におけるJ800レベルで達成すべき項目は、「自分の専門範囲の日常のもしくは非日常的な事柄について、事実の情報を蓄積した上で、総括し、報告できる。また、それに対し、ある程度の自信を持って自分の意見を提示することができる。(項目9)」「いろいろなところから集めた情報や議論をまとめることができる。(項目10)」「エッセイやレポートを書く時に、根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、さまざまな選択肢の利点と不利な点を説明できる。(項目11)」「いろいろな考えや問題の解決法を評価することができる。(項目12)」「一連の短い別々になっている要素を一つの流れに結びつけることによって、自分の関心が及ぶ身近な話題について結束性のある簡単なテキストを書くことができる。(項目2)」「一連の短い別々になっている要素を一つの流れに結びつけることによって、自分の関心が及ばない身近でない話題についても結束性のある簡単なテキストを書くことができる。(項目3)」「自分の関心がある専門分野の多様な話題について、明瞭で詳しいテキストを書くことができる。いろいろな情報や議論を、評価した上で書くことができる。(項目4)」「論拠となる詳細関連事項や具体例などによって自分の主要な論点を補強して、明快な描写や話をするすることができる。(項目20)」である。(表1参照)

先述した授業で扱った具体的な学習項目に照合してみると、課題(1)の「段落の構成の仕方と段落相互の構成」は、レポートや記事を書く、書くこと全般、話題の展開のカテゴリーの部分に必要な学習として行い、学習者に作文全体の構成に注意しながら文章を組み立てていくことへの意識付けを行うことを目的とした。課題(2)の「時間軸に沿って歴史的な経過を書く」では、組織や祝祭などの歴史を時系列的に現代につなげ、それに対する過去と現在の評価を書いてもらったが、これは項目9、項目10、項目2にあたると考える。課題

(3) 「文章の要約の方法」は、文章の主題を読み取り、内容の展開過程を含めた説明を行うという点で、J800レベルのほとんどのスタンダード案の項目に必要であると考えられる。課題(4)の「比較・対照と考察」では、社会的制度や規則について、あるいは自分の専門分野において日本と自国とを比較する文を書くという宿題を出したが、単純な比較に留まらず、比較により明らかになった事柄に対する評価にまで言及している学習者がほとんどだった。そして、その評価に学習者自身の考察を加え、それが日本留学の目的や専門領域の決定につながっていると書いた学習者も複数いた。比較については、スタンダード項目は学習者によって異なるものになったが、項目9、項目10に相当し、項目4に言及した学習者も多かった。(5)の「因果関係の述べ方」は、宿題として日本についての3つのテーマを提示した。少子化、平均寿命が伸びたこと、そして海外旅行者の増加について、要因について考えられることを書くというもので、これは項目3にあたりと考えられる。少子化についてのテーマを選択した学習者の中には、日本政府の対応を調べたうえで示し、解決法を評価する(項目12)学習者もみられた。課題(6)の「意見文の書き方」では、日常的、非日常的な事柄について事実の情報を分析し、根拠を提示しながら自分の意見を述べる、また、根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、さまざまな選択肢の利点と不利な点を説明し、評価、主張をもった結論が書ける、また具体例を挙げ、論点を補強し、明快な描写や話をするという点で項目9、項目11、項目20が相当すると考える。

3.4.3 次学期へ向けた改善点

(1) モデル文や課題作文について、次学期は時事的な問題を増やしたいと考えている。期末テストで課題とした、原発について自分の意見を述べるという作文では、賛成、条件付き賛成、反対など考え方はさまざまであったが、学習者が皆、自分なりの考えを持ち、この問題に関する関心の深さが強く感じられた。宿題を課す際にはテーマ設定が非常に重要で、テーマによって書こうという意欲が引き出され、よく考えられた作文が書けることがある。これは、日本で、あるいは学習者の母国で議論になり、学習者自身が様々な意見を耳にすることで多様な意見のストックを持ち、普段からそのテーマに向き合い、考察し、思考が深まっているのだと考えられる。メディアで報じられ、話題になっている時事問題をテーマとして選び、より多く教材として活用したい。

(2) 1学期は、意見・主張・評価が書けない、あるいは明らかに十分でない学習者が見うけられた。スタンダードの項目9の「総括し、報告する」までは書けるが「ある程度の自信を持って自分の意見を提示する」までは書けない、あるいは項目4で挙げられている、「自分の関心がある専門分野の話題についての事実関係」は書けているが、評価が不十分な学習者が見られた。これは教材や宿題のテーマに対して、自分で調べ、考察して書くという部分が不足していたことが原因だと考えられる。また、学習者個々人の作文のテーマ

に対する興味の違いによって、考察の深浅が如実に表れてしまったとも考えられる。教師から与えられたデータだけではなく、学習者自らが必要なデータを収集し、考察するという機会を増やしていくことが必要だと考える。

(3) 各授業の学習項目に即したモデル文を提示して授業を行うという授業形態をとったが、文法が中級後期のレベルにあっても、個々の学習者の読解力の差は非常に大きかった。読解力がないと主題がつかめず、要約や引用を行うことはもとより、学習項目のポイントを把握することも困難になり、授業の進行に影響する学習者もいた。学習者がモデル文の内容をしっかりと把握する時間を十分に与え、また内容についての確認も丁寧に行うようにしたい。また、長期的には、トピックやテーマのすりあわせが可能である他技能との連携も視野に入れてもいいかもしれない。

(4) モデル文の読解には語彙力も大きく影響していると考えられる。特に非漢字圏の学習者はモデル文を読むのに際し、漢字語彙にとっても苦勞していた。書く際においては、非漢字圏学習者は漢字語彙を使いこなせず、記述が回りくどいものになる傾向が見られ、また、漢字圏の学習者においては、語彙間の助詞の欠落や語彙使用の文法的な誤りが見られた。漢字語彙の用法については簡単に改善できる問題ではないだろうが、モデル文を読む際に、各々の漢字語彙がどのように使われているかを常に注意するような意識付けが必要だろう。

(5) 文章の構成ではなく、文法・文体に誤用（特にヴォイスやアスペクトについて）が見られる学習者がいたが、添削以外のケアが十分にできなかった。授業時間の制約があり、文法の説明などは最低限にせざるを得ないが、文法や文体に関する教材の使用や、宿題を課するなどの工夫をして改善を試みたい。

3.5 J900書く（木戸光子）

3.5.1 授業概要

J900では大学のアカデミック・ジャパニーズの必要性からレポートを作成する作文力養成を目的としている。J900の目標は、特定の話題について事実・意見を再整理して、3000字程度で構成の整ったレポートが書けることである。上級学習者（日本語能力試験1級前後）を対象に、レポート作成に必要な表現技術を学ぶために、新聞記事要約練習と評論などの文章の書き換えを通して、段落内と段落間を論理的に関係づける表現（文型、接続詞、文章型）による作文練習をし、作文練習で学んだ表現を用いて期末レポート作成を行った。

表7 「J951書く」2011年度1学期 授業概要

回	授業内容	宿題
1	オリエンテーション レベルチェック作文 新聞記事要約1「美術展中止」	
2	記事要約2「児玉清死去」 論点84(1) 作文の基本	作文の基本
3	記事要約3「パナソニック人員削減」 論点84(2) 課題の提示	課題の提示
4	記事要約4「被災地完全給食実施」 論点84(3) 定義と分類	定義と分類
5	記事要約5「クールビズ」 論点39(1) 同意と反論	同意と反論
6	記事要約6「ゴパン」 論点39(2) レポートの書き方1-構成、序論	レポート序論
7	記事要約7「福島被曝影響30年調査」 論点39(3) レポートの書き方2-本論(主張・根拠)	レポート本論
8	記事要約「デジタル読解力調査」 レポートの書き方3-結論、参考文献、注	レポート結論
9	レポートの要約	レポート提出
10	オフィスアワーでレポート作成の個別指導	

レポートの表現の説明は主に、『大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』（アカデミック・ジャパニーズ研究会編、アルク、2002年）の学習項目を用いている。各学習項目の作文練習は、毎年出版される評論集『日本の論点』（文藝春秋）の文章の一部、青少年スポーツの問題、および、大学生の就職活動問題を取り上げた評論を作文の題材として用いた。

この授業で書き換え練習を重視している。題材とした文章の段落や文章全体の構造や表現を書き換えることにより、読んだ文章の中の表現が産出できる表現にできるからである。以下、授業活動の中心となる2つの練習を説明する。

(1) 約15分の記事要約練習：記事全体の構造を縮約する要約練習を授業冒頭15分に行う。原文の構造の縮小コピーとなるように3文で要約文を作成する。原文から要約文への言い換え方法では、①重要表現の抽出、②類似表現へのまとめ直し、という2段階の書き換えを想定している。①は、原文の重要な内容の抽出という抜き出し箇所の的確さに焦点を当てる。この段階では原文から抜き出しただけの要約文でも可とする。②は、原文とは異なる表現で類似の意味の表現にまとめてみるという言い換えを試みる。

(2) レポートの書き方に向けて評論の一部を書き換えるという作文練習：レポート作成のために内容の一部を引用し、内容を要約して引用する。『日本の論点』という評論の文章の内容の一部について構造を書き換える。例えば、評論の冒頭部を「最近～ている。～は問題になっている。しかし、～。～のだろうか。そこで、本稿では～ために～について考察する。」のような文型を用いて序論に書き換えるような練習である。レポートの表現と

して書き換え練習に用いる表現は教科書『大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』に載っている学習項目であり、練習前に説明している。

作文の分析・添削する観点としては、構造・文体・表現についての留意点を説明している。構造では、段落分けに着目して段落ごとにどのような話題で文章が展開されているかに注意し、題材とする新聞記事や評論の書き手の意図を段落分け・話題・接続表現などを手がかりに読解するよう説明している。表現では、文の正確さ・語の選択、文体では、「だ体」「である体」など多様な文体からなる評論の文章の文体を学習者が意識化するようにしている。題材とする評論をレポートの一部になる文型を用いて書き換える練習によって、「である体」で書き言葉の語彙を用いるレポートの表現と文体を学習する。

3.5.2 スタンダードとの関連

J900レベルは「書く」という授業コース全体の到達目標であるアカデミック・ジャパニーズの「レポートが書けるようになること」の到達点に位置づけられる。そのため、文章ジャンルとしてはレポート、作文能力としてはレポート作成に必要な言語技術が求められる。1学期に行った授業と2010年度作成スタンダード案を照合すると、「書く」スタンダード案のカテゴリーの「レポートや記事を書く」「書くこと全般」「文章の展開（ディスコース能力）」について、J900だけではなく中上級の作文力全般の目標とすべき項目とJ900のみの目標として独立した目標となる項目に分けられる。また、新聞記事の要約練習によって、レポート作成の基礎となるテキスト構造・論理関係・上級に相当する文法・語彙の補強を行っている。

カテゴリー「レポートや記事を書く」の項目9「自分の専門範囲の日常的もしくは非日常的な事柄について、事実の情報を蓄積した上で、総括し、報告できる。また、それに対し、ある程度の自信を持って自分の意見を提示することができる。」、および、カテゴリー「書くこと全般」の項目4「自分の関心がある専門分野の多様な話題について、明瞭で詳しいテキストを書くことができる。いろいろな情報や議論を、評価した上で書くことができる。」は、レポート作成を目標とする中上級レベルの到達目標として、J800以下のレベルでもそのレベルに応じた範囲内で、レポートに至る作文技術の学習として達成される。J900では、専門性、多様な話題への対応、論理性、語彙・文法の制約のない上級の表現力がレポート作成によって達成される。

一方、項目5、13、21は他レベルでは学習できないJ900レベル独自の項目として位置づけられる。J900レベルでは特に上級に値するレポート作成能力、すなわち、論理関係の明瞭さ、テキスト構造の明確さ、さらに表現の複雑さも備えた作文力が求められる。カテゴリー「レポートや記事を書く」の項目5、13は論理関係とテキストの構造に関する項目で、これらは評論とテキストを読解して他の構造に書き換える作文練習を通して学習している。

また、カテゴリー「話題の展開（ディスコース能力）」の項目21「複雑な描写をしたり、複雑な話をすることもでき、下位テーマを統合させながら、特定の点を発展させたり、適切な結論でまとめることができる。」のように、レポート作成に必要な語彙・文型を書き換え練習という形で学習できるようにしている。

表にあるその他の項目は、項目5、13、21に付随する項目として位置づけてよいだろう。カテゴリー「レポートや記事を書く」の項目10は情報や議論の収集と整理に関すること、項目11、12、13、14、15は論理関係の明瞭さに関すること、項目16、17とカテゴリー「書くこと全般」の項目6は作文の表現自体のわかりやすさに関することだと見られる。

3. 5. 3 次学期へ向けた改善点

スタンダードの項目が75分授業計10コマの授業の中でレポート作成能力が学習者への程度定着しているかという問題がある。1学期の授業では作文は宿題になり、前回の作文のフィードバックや作文作成に向けての講義が授業活動の中心であった。しかし、学習者により効果的に学習項目が定着できるようにするには、学習者が受け身ではなく積極的に参加できるような授業活動の工夫も必要である。一方的に添削を返すだけでなく、ペアやグループでのピア活動など学習者自らの「書く」活動を活性化させるための授業活動の導入が考えられる。さらに、題材とする評論や記事が日本語学習に適切なものかという文化的問題や、レポート特有の文体や文型、漢字語彙を適切に用いるという日本語の書き言葉特有の問題にも配慮した学習内容と方法を検討していきたい。

4. 今後の課題

以上、「書く」スタンダード構築に向けて、2010年度スタンダード案とその経緯、および、2011年度J500-J900「書く」1学期授業概要とスタンダードとの関連を報告してきた。スタンダードにある項目は外国語教育一般に通じるものである。一方、日本語スタンダードの課題としては、漢字かな交じり文という日本語特有の表記や漢字語彙や書き言葉特有の文体など日本語の正書法に関わる制約をどのレベルで組み込んでいくか、作文の話題や題材の選択が文化的な面でも学習効果の面でも適切かなどが挙げられる。今後は2011年度2学期以降の授業での実践を通して、「書く」スタンダード案の改定、さらには2014年度から実施される2学期制への対応を考えていきたいと思う。

注

1. アンケート調査の詳細は劉・木戸 (2012) 参照。
2. 2010年度スタンダード案は当時「書く」の担当者、里見文 (J500担当)・石上綾子 (J600担当)・和氣圭子 (J700担当)・福留伸子 (J800 担当)・木戸光子 (J900担当) 作成。

3. 訳語はすべて、吉島・大橋他訳（2004）に準じた。

参考文献

- 嘉数勝美（2011）「『JF日本語教育スタンダード』がめざす日本語能力とは何か」『早稲田日本語教育学』9, 107-113. 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 国際交流基金（2009）『JF 日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金
- 国際交流基金（2010）『JF 日本語教育スタンダード2010』国際交流基金
- 坂本恵（2007）「『アカデミック・ジャパニーズ』での教育項目について考える：JLC日本語スタンダードの作成に向けて」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第33号：97-110
- 東京外国語大学「世界的基準となる日本語スタンダードの構築」公式ホームページ
<http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/jlc-gp/index.html> 2011年8月現在
- 劉雅静・木戸光子（2012）「筑波大学留学生センターにおける学習者のニーズ分析-J500-900「書く」の場合-」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第27号：319-332
- Council of Europe（2001）*Common European Framework of Reference of Languages：Learning, teaching, assessment*. Cambridge：Cambridge University Press.（吉島茂・大橋理枝訳2004『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社）
- Way, D. P., Joiner, E. G., and Seaman, M. A（2000）. Writing in the secondary foreign language classroom：The effects of prompts and tasks on novice learners of French. *The Modern Language Journal*, 84：171-184